

〔書評〕

飯能市名栗村史編集委員会編『名栗の歴史(上)(下)』

——山村研究の総合化にむけて——

本書は、平成一七年(二〇〇五)一月一日に埼玉県飯能市と合併した名栗村の古代から現代までの歴史を、筑波大学の加藤衛祐氏を村史編集委員長として編まれた自治体史である。

現在、日本国内では、山村地域の過疎化や林業の衰退が叫ばれており、そうした状況の中で、山村である名栗村の歴史をまとめた本書が刊行されたことは注目されよう。『名栗の歴史(上)』は第一―三編を、『名栗の歴史(下)』は第四―五編を収録している。本書の構成と各章・節の執筆者は次の通りである。

第一編 原始・古代の名栗地域

第一章 名栗地域の地形と地質(柳戸信吾)

第二章 原始時代の名栗地域(宮内慶介)

第三章 古代の名栗地域(宮瀧文二)

第二編 中世の名栗地域

第一章 鎌倉時代の名栗地域(諸岡勝)

第二章 南北朝・室町時代の名栗地域(同右)

飯能市名栗村史編集委員会編『名栗の歴史(上)(下)』

第三章 戦国の争乱と名栗地域(同右)

第四章 中世の社会と信仰(同右)

第三編 近世の上・下名栗村

第一章 近世の幕開けと上・下名栗村(第一節 加藤衛祐・丸山美季、

第二・三・四節 加藤衛祐、第五・六節 丸山美季、第七節 野尻泰弘)

第二章 江戸地廻り山村の確立(第一・二・五・六節 加藤衛祐、第

三・四節 丸山美季)

第三章 山村豪農の経営と村社会(第一・二節 丸山美季、第三・四節

加藤衛祐、第五節 野尻泰弘)

第四章 山村の暮らしと文化(第一―六節 丸山美季)

第五章 近世後期の社会変動と武州世直し一揆(第一節 野尻泰弘、第

二・三節 丸山美季)

第四編 近代の名栗村

第一章 明治維新と名栗村の成立(第一・三・四・五節 井上かおり、

第二・七節 加藤衛祐、第六節 安藤耕己・丸山美季)

高橋 伸 拓

- 第二章 明治後期からの山村社会の近代化(第一節(一)湯澤規子、第一節(二)尾崎泰弘、第一節(三)柳戸信吾、第二節(一)(二)湯澤規子、第二節(三)(四)加藤衛拓、第三・七節 丸山美季、第四・八節 井上かおり、第五・六節 安藤耕己、第九節 加藤衛拓)
- 第三章 大正デモクラシー期の産業と社会(第一節 加藤衛拓、第二節 柳戸信吾、第三・四節 犬飼大、第五・六節 安藤耕己)
- 第四章 昭和恐慌・戦時体制下の村政と山村社会(第一・三・五節 犬飼大、第二節 加藤衛拓、第四節 木暮甲吉・加藤衛拓、第六節 安藤耕己)

第五編 現代の名栗村

- 第一章 戦後復興と山村社会の活性化(第一・六節 犬飼大、第二節 加藤衛拓、第三・四・五節 安藤耕己)
- 第二章 高度経済成長下の山村社会(第一節 犬飼大、第二節 加藤衛拓、第三・四節 湯澤規子、第五節 安藤耕己)
- 第三章 名栗村から飯能市へ(第一・二・六節 犬飼大、第三・七節 加藤衛拓、第四・五節 安藤耕己)

それでは、本書の内容の概略を述べたいと思う。なお、紙幅の関係や評者の力量の問題から、林業史・山村史の点で注目される記述を主に取り上げることにし、全ての内容に言及できないことをお断りしておきたい。

第一編は、原始・古代の名栗地域について記している。第一章は、名栗地域の地理的位置、自然環境の形成過程等を、第二章は、原始時代の名栗地域を取り上げている。縄文時代の名栗地域は前期に山間部への集落の進出がみられるとする。第三章は、古代の名栗地域を取り上げ、平安時代の名栗地域では山野が「杣」や焼畑として利用されていた可能性を示唆する。

第二編は、中世の名栗地域について記述している。第一章は、名栗地域の史料での初見を示し、それは秩父神社文書の元亨四年(一三三四)一〇月に作成された「造営木注文」の中の「那栗郷分」(名栗)との記載とする。第二章は、南北朝・室町時代の名栗地域を、第三章は、戦国期の名栗地域を、第四章は、名栗地域の寺社と仏像等を取り上げている。

第三編は、近世の上・下名栗村について記している。第一章第一節は、上・下名栗村での検地や支配の変遷を追っている。第二節は、武州山之根筋における寛文検地の特徴について言及し、それは切替畑検地による「山」の広範な把握にあり、上・下名栗村でも里山は同様であったとする。上・下名栗村の奥山は、検地の対象にはならず、広大な村中入会地と幕府の御林が形成されたとする。第三節は、村人の林野所持を確立する上で、寛文検地は重要な役割を果たしたとする。第四節は、家と村の確立を、第五節は、上・下名栗村の年貢を取り上げている。第六節は、上名栗村の古組・新組での村役人の変遷、下名栗村の上・下組での名主設置と村運営を、第七節は、上・下名栗村の寺社の運営等を取り上げている。

第二章第一節は、上・下名栗村を含めた飯能川上村々が享保期(一七一六)三〇までに炭については飯能を流通の核とし、材木については江戸に直結する産地となっていたとする。第二節は、上・下名栗村の造林の拡大と入会地を取り上げている。下名栗村は、入会地のうち立出しの対象となった林場・柴地について、その利用を入会地に近い組の村人へのみ利用させた。上名栗村は、各入会地はそれに近い組が利用してきたため、割山の必要性はなかったが、立出しによる入会利用への圧迫があったとする。第三節は、上名栗村の新組・古組への分離、各組への名主の設置、文書の管理・保管を、第四節は、山伏峠新田の開発、編入、利用を取り上げている。

る。林業が主要な生業であった上名栗村では、土地の性質に見合った活用をすることで、重要な資源に「新田」は転換したとする。第五節は、幕府の御林における御用炭生産は上・下名栗村ともに村の経済を恒常的に支える生産ではなかったとする。第六節は、上名栗村炭焼稼人の製炭原木の不足状況、下名栗村入会地(有間谷)の製炭原木の存在にふれている。

第三章第一節は、筏仲間を取り上げ、幕末期に西川材流送の飛躍的發展を支えた組織となったとする。第二節は、町田家による江戸までの材木の流通ルートの整備は西川材の流通発展に大きな役割を果たしたことを指摘する。第三節は、上・下名栗村の村落構造の違いは入会地の中に恒常的に村経済を支えるだけの薪炭林があるかないかに原因を求められるとする。

第四節は、町田家の経営が大山林経営者・材木商人として多くの年季奉公人・日雇人足を組織するという生産者の側面があり、炭焼人・駄賃稼の組織者として機能し、地域経済の維持・継続にとって重要な役割を果たしたとする。第五節は、上・下名栗村の人口、婚姻、通婚圏にふれている。

第四章第一節は、下名栗村の豊住秀次郎と上名栗村の町田勝治郎の旅の内容を紹介している。第二節は、上名栗の柏林寺、下名栗の楞嚴寺の大般若経から奉納者の所在地域等にふれている。楞嚴寺への大般若経奉納者の地域的分布は、炭・材木の生産・流通と密接に関わるとする。第三節は、上・下名栗村の祭礼と事件を、第四節は、上・下名栗村の寺子屋・私塾を紹介している。第五節は、新立町田家に伝来した蔵書を中心に、俳諧等の文化活動を、第六節は、上名栗村の医療事情を取り上げている。

第五章第一節は、改革組合村の設置を取り上げ、上名栗村と下名栗村は、隣村であったが、別々の組合村に編成されていたことにふれる。第二節は、武州世直し一揆の経緯を新史料「変事出来二付心得覚記」に沿ってみてい

る。第三節は、飯能戦争を取り上げ、戦争に敗れて上名栗村に落ちのびた「振武軍」の浪士たちについて言及している。

第四編は、近代の名栗村について叙述している。第一章第一節は、上名栗村新・古組の廃止と村組の再編等についてふれている。第二節は、上・下名栗村の地租改正と林野の官民有区分を取り上げている。上名栗村は、官有地はほとんどなく、下名栗村は、採草地が官有地化し、地元民の利用は制限されたとする。第三節は、秩父事件を取り上げ、上・下名栗村は、交通の要衝地として秩父事件の防御の最前線の一つとなったとする。第四節は、明治二年(一八九)四月一日の上・下名栗村の合併と名栗村の成立を取り上げている。上・下名栗村の入会地は、区有財産として区有林となった。第五節は、警察・消防の成立と衛生行政を、第六節は、小学校の設置等を取り上げている。第七節は、「古今稀成年代記」から、山村の豪農平沼家が、視野の広さと情報収集力によって近代の経営を支えたとする。

第二章第一節は、明治初期から大正期にかけて生じた名栗村の人口増加にふれている。炭焼稼・材木稼の発展等に伴って、労働力の需要が増大し、地域の人口扶養力が向上したとする。第二節は、交通手段や運搬機能の発達によって、製炭業や材木伐出業等が一層重要な産業となったこと等を取り上げている。第三節は、明治初期における材木商人仲間の動向、西川材木商組合の成立、西川材木商同業組合への再編をみる。第四節は、地方改良事業の展開と名栗村の国有林場下戻し運動の経過をみている。下戻し申請は、明治四〇年四月一三日に認可され、秣場は返還された。第五節は、甲南智徳会を取り上げ、第六節は、義務教育の確立、下名栗区での学校林の植林等にふれている。第七節は、東海道本線開通以前と以後の旅を紹介し、第八節は、日清・日露戦争下の名栗村の動向等をみている。第九節は、

旅人宿積田屋に残された明治末期の宿帳を取り上げ、来訪者の役割をみている。名栗村では、材木の輸送や販売について外部から関与する余地は少なく、それが林業に關係する来訪者の低い割合に表れているとする。

第三章第一節は、甲南智徳会による共同造林と県造林の展開を取り上げ、第二節は、名栗水電株式会社が名栗村の近代化に果たした役割をみている。第三節は、製炭業者や炭問屋による区域分離要求運動などの一連の争論である木炭事件を取り上げている。これが契機となって、郡域変更運動が盛り上がり、大正一〇年七月一日に名栗・吾野両村は入間郡へ編入されたとする。第四節は、村政の展開や村財政の状況等を、第五節は、上名栗第一尋常高等小学校の建設地をめぐる争論等を取り上げている。第六節は、甲南智徳会から名栗村青年団への改組、成人の文化活動等を紹介している。名栗地域の俳人は、山里ならではの職にあった人たちが多かったとする。

第四章第一節は、経済恐慌の影響、上・下名栗区と区有財産の廃止等をみている。第二節は、村有財産の統一と共有組合の成立を取り上げ、次に、上名栗施業森林組合と下名栗施業森林組合の設立をみている。前者は昭和一七年に「上名栗共有林組合」となり、後者は同年に「下名栗共業造林組合」と名称を変更し、それぞれ現在に至る。第三節は、国民精神総動員運動の展開等を、第四節は、名栗村森林組合の設立と運営にふれている。名栗村森林組合は、戦時体制という非常時において軍需用材確保のために設立され、こうした需要に信用力の向上、木材業者の職員化、林業労働者の直雇という合理化を進めた。この合理化への試行は、西川林業再生に向けて一つの示唆を与えたとする。第五節は、名栗村における日中戦争及び太平洋戦争への出征者・戦没者数等を、第六節は、戦時体制に至る学校制度の展開と学童疎開の受け入れを取り上げている。

第五編は、現代の名栗村について記している。第一章第一節は、農地改革の実施等を、第二節は敗戦後の名栗村の農林業等を取り上げている。昭和二五年の『名栗村勢要覧』によると、就業者は一〇七一人、農業に三四パーセント、林業に四二パーセントが従事していた。昭和二六年六月公布の新「森林法」に基づき、名栗森林組合の組織の再編がなされた。第三節は、新制小学校の誕生等を、第四節は、名栗村青年団の復活等を、第五節は、名栗村におけるスポーツ活動の展開を紹介している。第六節は、昭和の大合併への不参加を取り上げている。

第二章第一節は、村政の展開、武州鉄道建設計画とその挫折等にふれている。第二節は、戦後の名栗村の林業生産の展開を取り上げている。戦後、名栗村では林業生産が活況をみせ、積極的な造林が行われたが、高度経済成長期には、既にその衰退への兆候が林業労働者数の急減に表れるとする。『二〇〇〇年世界農林業センサス』によると、造林業者(森林組合)も木材業者(素材生産業者)も各一軒となり、林業労働者はわずか九人となっている。優良な森林資源を活用できる企業や組織の育成が地域的な重要課題とする。第三節は、高度経済成長期における農林業の動向、名栗村の産業構造の変化と、その変化を村人B・Cの就業履歴からみている。Bは新制中学校を卒業と同時に山仕事に従事し、その後飯能の製材工場の運転手、リース工場へ就職した。この過程をみても名栗村の産業構造の変化が第一次産業の推移と第二次産業への移行として単純には説明できないとする。第四節は、名栗村の道路整備等を、第五節は、小学校の統合と名栗村立幼稚園の創立等を紹介している。

第三章第一節は、有間ダム建設や過疎対策と村づくりの推進等を、第二節は、村営水道の建設等をみている。第三節は、西川広域森林組合の発足

(平成一四年六月)等を取り上げている。西川広域森林組合は、優良な森林資源を有しており、この優良資源を背景に、組合員との信頼関係を築き、高性能機械の導入と若年労働者の技能訓練によって、適切な間伐・主伐事業や再造林・森林保全事業の発展が期待されるとする。第四節は、公民館等の施設整備とサークル活動の展開等を、第五節は、「総合的な学習の時間」の導入等を紹介し、第六節は、飯能市との合併について取り上げている。第七節は、村史編さん事業の展開と、森林文化の再生、森林資源の活用等の名栗地域の未来に向けての意見が述べられている。

以上、本書を概観してきた。最後に、本書の意義や今後の課題について私見を述べておきたい。まず、本書が名栗村の歴史を上名栗村だけではなく、下名栗村も含めて記述している点に意義がある。すなわち、名栗村の歴史は、これまでに上名栗村の町田家文書(学習院大学史料館蔵)を用いて、山中清孝『近世武州名栗村の構造』(名栗村教育委員会、一九八一年)、『名栗村史』(同上、一九八二年)が刊行されているが、上名栗村の近世中心の叙述であった。今回は、多角的な視野から新たな村史の執筆のために、史料調査が実施され、その成果が反映されている。「加藤衛拓家文書」等の下名栗村の文書の調査・整理が行われ、これにより、上・下名栗村をあわせて、名栗村の歴史の展開をみるようになった。また、上名栗村については、加藤衛拓氏の『近世山村史の研究』(吉川弘文館、二〇〇七年)の成果が盛り込まれ、より具体像が描かれている。

そして、これと関連して、古代・中世・近世・近代・現代までの名栗村の歴史を見通した点に意義がある。特に、名栗村の林業生産について、近世から、明治・大正、昭和の戦前と戦後、高度経済成長期から現代までの叙述がなされているのは、林業史の点から注目される。冒頭でもふれたよ

うに、現在、日本では山村地域の過疎化や林業の衰退が叫ばれており、今後の山村や林業のあり方を考える上で、現在に至るまでの歴史的過程を具体的に示したことは意義深いといえる。ただし、本書が残した課題もあるように思う。本書は、史料的制約によるものと思われるが、豪農を中心とした記述となっている。豪農経営については明らかにしたが、その下で材木生産等に携わった林業労働者の存在形態については不明な点がある。林業労働者にとって、材木生産等による稼ぎが家の経営の中でどの程度の割合を占めていたか。この点を追究することで、村や地域における生業としての林業の位置付けがより明確になるものと考えられる。そして、本書は、上・下名栗村の領主についての記述があまりなく、領主側が上・下名栗村を山村としていかに認識していたのか気になる点である。

以上、本書の意義や今後の課題について私見を述べてきた。現代の山村や林業が抱える問題を考えていくために、今後も山村史・林業史の研究を行っていく必要がある。西光三氏も指摘されるように、いずれは山村史の事例の総合化を行い、それをふまえて歴史学から提言していくべきだろう。本書の内容を十分に汲み取ることができていない点が多々あると思われるが、何卒ご海容願いたい。

註

(一) 西光三「書評 加藤衛拓著『近世山村史の研究』江戸地廻り山村の成立と展開」『徳川林政史研究所『研究紀要』第四一号、二〇〇八年)。

(A5版、上巻四六二頁・下巻五四〇頁、上・下巻ともに二、〇〇〇円、飯能市教育委員会、二〇〇八年・二〇一〇年刊)